

大相撲と親孝行（協同組合通信/井戸端論弾） 15.02.03

国技・大相撲が、初場所で新時代を刻した。平成の大横綱貴乃花の衝撃的再出場と印象的な清々しい引退劇。勝負の世界で力の優劣を、万人の前にこれほど明確に示すプロスポーツは類がない。我が国の伝統文化と力人（ちからびと）が嘗々と築き上げてきた賜物だ。

モンゴルの大高原に遊び育った一少年が単身高校留学し、大相撲史を塗り替え、頂点に立った。

先輩の角力取りにはなす術なく、覇気も感じられず残念だ。スポーツ生理学や科学的トレーニング方法の発展で、全てのスポーツは、身体能力が優先することが分った。一見し、日本の関取と、角界を席卷するモンゴル出身力士の体形・表情に差がある。筋肉質の鍛え上げられた日本の関取は、寺尾が最後になるのか。思い至った2点。食べ物の変化。ちゃんこの中身はもとより、手軽なハンバーグ等では、体重増で稽古も続かず血肉にはなるまい。第一ご飯とは合うまい。滋養がない。

貴乃花が千代の富士に、真っ向から挑み最初の対戦で破って、後継者となり、無敵の時代には、颯爽とした風格ある孝行息子であった。師匠と両親を敬う気持ちは、優勝インタビューの少ない言葉で心に響き、培われた形式美と相俟って熱かった。理由は知らないが、一時不仲の報道に接し悲しかった。その頃から体形が変化し、優勝も遠ざかり、何時しか故障勝ちとなった。横審一員の激しいコメントの中、心技体のバランスは如何だったか。

新横綱朝青龍はモンゴル相撲一家のエリート。貴乃花と類似した育ち方。共通の最も優れた点は、親孝行であると見た。親や故郷を思う心は力の源。本人の資質もあるが、遠くない昔、我が国の良き風習だった。孝を忘れ、子供が元気に走り回り心置きなく遊べる場を無くした日本。我々親に責任がある。

今こそ、親子を考えたい。

大相撲の門戸を、世界に開いたのは日本の度量だ。新世紀、大平原に遊学する強い宝を育てよう。教師よ目を覚まし、本来の教育を考えて欲しい。総合学習・交換留学でモンゴルと友好を深めるプロジェクトで、平成の子供達を野に放て。

（ 気象情報システム株式会社 高津敏 ）